ヨハネの手紙第一

§3　3 つの検証の詳論（3:1–4:6）〔その4〕
§4　3 つの検証の統合（4:7–5:5）〔その1〕

前回の復習

1. 互いに愛し合うということは、聖書を通して教えられている、最も重要な掟である。
2. クリスチャンは神の子であるならば、イエス・キリストがそうされたように、口先だけではなく行いと真実をもって互いに愛し合うことがふさわしい。
3. 愛の命令を実行できているとき、私たちは主の御前に大胆に出ることができ、御心に沿った祈りをささげることができるだろう。
4. 私たちが神に留まり、神も私たちに留まっておられるということは、私たちに与えられた聖霊の働きによって知ることができる。

§3　3つの検証の詳論（3:1–4:6）〔その4〕

3．神学的検証：知識に基づく洞察の実践（4:1–6）

3–1．霊を見分ける必要性（4:1–3）

4:1 愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。

1. 読者たちへの警告
   (1) 直前の 3:24 では、クリスチャンに内住される聖霊の働きについて触れられていた。
   (2) この流れを汲んで、ヨハネは読者たちに、「全ての霊が神から出たものではない」という警告を与えはじめる。

2. 「にせ預言者」たちの影響
   (1) 「にせ預言者」は、2:18 の「多くの反キリスト」と同じ人々を指しているのだろう。
   (2) 彼らは、彼らの教えを「霊的な教え」として会衆に与えていたのかもしれない。
   (3) ヨハネの手紙の読者たちを惑わしていた異端者たちは、紀元 2 世紀に本格化した運動

である「グノーシス主義」の人々に近い考えを持っていたようである[1]。

(4) グノーシス主義の信奉者たちは、自らを秘密の知識（グノーシス）を得た「霊的な人々」であると主張していた[2]。

(5) 他にも、天的（あるいは霊的）な啓示や託宣のような「秘密」といった要素は、ギリシャ・ローマ時代の宗教によく見られるものだった[3]。おそらく読者たちは小アジア（エペソなど）の人々だったため[4]、そういった異教の影響を強く受ける環境に住んでいた。

(6) 読者たちには、「霊的」とされる教えが横行する中で何が本当に神の霊によるものなのか、確かめる必要があった。

3. 今日において、神から出た霊かどうかを確かめる必要性について

(1) 現代においてもキリスト教の異端は数多く存在する。

(2) それだけではなく、教会の内部でも、「神からの預言」や「祈りで与えられた答え」といった理由で、様々な主観的な教えが語られることがある。

(3) 私たちにおいても、語られる教えが聖霊からのものなのかどうか（聖書に基づいたものなのかどうか）、霊的な洞察力を養う必要がある。

4:2 人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。
4:3 イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。

1. 自らの主張を「霊的」なものとして教えている者たちについて、彼らの霊が神からのものかどうか確かめるポイント

(1) それは、彼らが「イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す」（新共同訳）かどうかである。

---

[1] ジョン・R・W・ストット『ティンデル聖書注解　ヨハネの手紙』千田俊昭訳（いのちのことば社、2007 年）56 頁；神戸基秀「ヨハネの手紙第一 覚書き（2）手紙の背景について」2016 年 9 月 3 日<http://balien.hatenablog.com/entry/2016/09/03/222805>（2017 年 7 月 7 日閲覧）

[2] エドウィン・M・ヤマウチ「グノーシス主義」『キリスト教 2000 年史』井上政己監訳（いのちのことば社、2000 年）96 頁

[3] Robert W. Yarbrough, *1–3 John*, *Baker Exegetical Commentary on the New Testament*, eds. Robert W. Yarbrough and Robert H. Stein (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2008), Kindle ed., locations 5747–52.

[4] Glenn W. Barker, *1 John*, *Expositor's Bible Commentary*, vol. 12, ed. Frank E. Gaebelein (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1981), p. 301.

(2) なぜなら、そのような形で「イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものでは」ないからである。

2. 「イエス・キリストが肉となって来られた」という告白について

(1) この部分は、「イエスは肉となって来られたキリストである」と読むこともできる[5]。

(2) パウロは次のように教えている。

I コリ 12:3 ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。（ロマ 10:8-10 も参照）

(3) 「イエスは主です *Kurios Iēsous*」という告白は、「イエスこそ（聖書において啓示されてきた）ヤハウェご自身である」という意味を持っている[6]。これは、「イエスは人として来られたヤハウェである」と告白しているのと等しい。

(3) 「イエスは主です」という告白は、ヨハネが言う「イエス・キリストが肉となって来られた」という主張と（強調点の違いはあれど）類似した内容の告白である。そしてパウロは、やはりこのような告白は、聖霊の働きによらなければすることができないと教えている。

(4) 唯一の神が人となって来られた（受肉された）ということは、人間の知性では理解し難いことである。だからこそ、グノーシス主義者たちは人間イエスと霊的存在であるキリストとを区別して、理解しやすい形のキリスト論を造り上げた。

(5) 異端のキリスト論が理解しやすいものだとしても、神から出たものではない。むしろ、そのような形でイエス・キリストに関する真理をねじまげてしまうのは、「反キリストの霊」によるものである。

3. 「反キリストの霊」について

(1) 読者たちは、「反キリストの霊」が来ることを聞いていた。そして、ヨハネは「今それが世に来ているのです」と言っている。

(2) 反キリストの霊は既に多くの人々に働いており、その結果「多くの反キリスト」が現れている（2:18 参照）。

(3) 反キリストはキリストに敵対する、そして「キリストの代わりを務めようとする者」である。その霊はキリストに関する偽りを広めようとする。

---

[5] ストット『ヨハネの手紙』174–75 頁

[6] N・T・ライト『使徒パウロは何を語ったのか』岩上敬人訳（いのちのことば社、2017 年）134–36 頁

(4) 私たちクリスチャンは新しい（そして、多くの場合は耳障りのいい）教えを耳にしたとき、「イエスは肉となって来られたキリストである」そして「イエスは主です」という真理をもって、その教えが神からのものなのかどうか判別しなければならない。

3–2. 読者たちへの励まし（4:4–6）

4:4 子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。

1. ヨハネはここで、「イエスを告白しない偽預言者たちの霊は反キリストの霊である」という教えの適用として、読者たちに励ましを送っている。
   (1) 読者たちは偽預言者たちに悩まされていた。しかし、ヨハネは彼らに対して「あなたがたは神に属しており、偽預言者たちに打ち勝ちました」と宣言している（新共同訳）。
   (2) なぜなら、読者たちの内におられる神は「この世のうちにいる、あの者よりも力があるから」である。
   (3) 「この世のうちにいる、あの者」とは、ヨハネの福音書でイエスが度々口にしておられる「この世を支配する者」と同じ存在であろう。これはサタンのことであると思われる。
   (4) イエスは、「悪魔のしわざを打ちこわすため」に来られた（3:8）。イエスにとどまるクリスチャンは、神の目から見れば既に悪魔に打ち勝っている。だから、悪魔に属する偽預言者たちにも打ち勝っているのである（続く 4:5 を参照）。

4:5 彼らはこの世の者です。ですから、この世のことばを語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾けます。
4:6 私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分けます。

1. 偽預言者たちと「この世」
   (1) 時に、使徒たちの教えよりも偽預言者たちの教えの方が、人々の心を惹きつけることがある。なぜなら、偽預言者たちは「世に属して」いるからである（新共同訳）。
   (2) 私たちはこの現象に惑わされず、冷静に物事を見分けるべきである。
   (3) 聖書に基づいたメッセージに耳を傾けるのが主に「神を知る人」（新共同訳）であり、「神に属していない者は、……耳を傾け」ないのは当然である。
   (4) だから、(1)のような現象を目の前にしても、私たちは「真理の霊と惑わす霊とを見分け

ること」ができる（新共同訳）。

2. 聖書のメッセージの愚かさ
   (1) 聖書に記されている真理は、この世における一般論からすれば「愚か」である（I コリ 1:18 参照）。
   (2) パウロは次のように説明している。

   I コリ 1:27 しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。

   I コリ 1:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。

   I コリ 1:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

   (3) 私たちやヨハネやパウロのように、この「愚か」な真理を高らかに宣言していく。
   (4) その使命を果たしていくに当たって、「反キリストの霊」による偽預言者たちの働きに惑わされてはならない。
   (5) だからこそ、私たちは冷静に「どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめ」る必要がある。

§４　3つの検証の統合（4:7–5:5）〔その１〕

1．社会的検証のさらなる詳論：愛の実践の仕組（4:7–12）

4:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。
4:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

1. ヨハネは再び、3 章後半で語っていた「互いに愛し合う」というテーマへ戻っている。
   (1) 2:29 や 3:9–10 では「義を行う者がみな神から生まれた」、「だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。……義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです」と言われていた。
   (2) 神から生まれた存在であるクリスチャンにとっては、義の実践、より具体的には兄弟愛の実践が自然なことである。これが、3 章後半から学んだ内容だった。
   (3) 直前の 4:6 に出て来た「私たちは神から出た者です」をキーワードにして、ヨハネは再

び「兄弟姉妹同士の交わりを保ち、互いに愛し合っている者は救われている」ということの確認に戻り、さらに詳しく説明していく。

2. 「愛は神から出ているのです」
   (1) 愛は神から出ているからこそ、神から生まれた私たちは互いに愛し合うべきである。
   (2) 愛は神から出ているからこそ、クリスチャンである私たちが神の子であるということの確証は、兄弟愛の実践により得られる。
   (3) 兄弟愛を実践する者は、その愛ゆえに、神から生まれたことがわかる。そして、神から生まれた者であるならば、神を（体験的に）知っているはずである。
   (4) すなわち、愛の実践がない者に神がわかるはずはない。なぜなら、「神は愛だから」である。
   (5) 「神は愛」は、神を表現する言葉の中でも、おそらくクリスチャンにとって最も印象的なもののひとつである。
   (6) ヨハネは 1:5 で「神は光」だと言っていた。これは、神の義の性質を強調する表現だった。
   (7) 同時にここでは、神の愛の性質を単刀直入な言葉で表現している。

4:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。
4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

1. 神の愛とイエス・キリストの到来
   (1) 「神は愛」であるということは、創世記からずっと啓示されてきたことである。それが最も強烈に示された出来事こそが、神の御子イエス・キリストの世への到来である。
   (2) 4:1-3 で強調されていた「イエス・キリストが肉となって来られた」という事実は、単に神学的に重要であるだけではない。この事実があってこそ、「神の愛が私たちに示された」のである。
   (3) 神の御子が世に来られ、愛されるに値しない罪人である私たちのために、「なだめの供え物」となられた。神ご自身である方が、「神の小羊」として屠られ、犠牲の血を流された。それによって、私たちに「いのちを得させて」くださった。
   (4) ヨハネはこの衝撃的な事実の目撃者として、「ここに、神の愛が私たちに示されたのです」と語っているのである。

(5) まさに、まず「ここに愛がある」のであって、最初に私たちの側から神に愛を示したのではない。私たちは、神から一方的な驚くばかりの愛を示していただいたのである。

4:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

1. 私たちが互いに愛し合うべき理由
   (1) 第一の理由：私たちは光であり愛である神から生まれた存在であるため、正しい道を歩み、互いに愛し合うことは当然である（2-3 章の内容）。
   (2) 第二の理由：「神がこれほどまでに私たちを愛してくださった」からという責務。これは、3:16 でイエスの自己犠牲を通して既に語られていた。
   (3) 神の愛（アガペ）は、決断や選択に基づいた愛である。創造主である神は、私たち罪人に対する決断／選択による愛を、イエス・キリストによる贖いという形で強烈に示された。
   (4) 私たちはこの一方的な愛により新しく生まれ、永遠の命をいただいた。だからこそヨハネは、「神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです」と言っている。
   (5) これは単純で、当然の理論である。

4:12 いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

1. 「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。」
   (1) ヨハネは福音書 1:18 でも、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」と述べていた。
   (2) ここでは、ほとんど同じ言葉が使われている。
   (3) 「いまだかつて神を見た者はいない」からこそ、御子イエスが世に来られ、私たちに神を説き明かしてくださった。
   (4) 今は、御霊なる神が私たちの内におられる。

2. 神は愛によってご自身を私たちに示される。
   (1) 御霊なる神が私たちの内におられるとは、パウロによれば、イエスご自身が私たちに内住しておられるということでもある（ロマ 8:10）。「聖霊とキリストとは、区別可能

である。しかし、分離不可能である。」[7]

(2) その私たちが互いに愛し合うなら、神の愛が私たちの内で完全なものとなり、神はご自身を私たちに示される。

(3) 4:10 で示唆されていた通り、私たちの愛は私たち自身から出ているのではない（より詳しくは、4:13 以降で学ぶ)。それは、私たちの内におられる神ご自身からのものである。

(4) 私たちが互いにその愛を実践するとき、神の愛は私たちの内で完全なものとなる。これによって、私たちはさらに神を深く知るようになる。

まとめ

1. クリスチャンは、目に見えない神を信じており、目に見えない希望を持っている（ロマ 8:24 ; II コリ 4:18)。だからといって、何でも無批判に信じてしまうという「盲信」はよくない。私たちは、霊的な洞察力を身につけるべきである。ポイントは、センセーショナルな教えを宣べ伝えている者が、「イエスは人となって来られたキリスト」だと信じているかどうかである。

2. 「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハ 3:16）
天地万物の創造主である神がこれほどの愛を示してくださったのだから、神の子であるクリスチャンは互いに愛し合うべきである。

3. 兄弟愛を実践するときの愛ですら、私たち自身によるものではなく、内におられる聖霊からもたらされるものである。聖霊によって湧き上がる愛を実践するとき、神の愛は私たちの内で完全なものとなり、私たちはさらに神を深く知るようになる。

[7] 中川健一「ローマ人への手紙 第 28 回 聖化の力（聖霊）(2) ―死ぬべきからだからの解放―」ハーベストフォーラム東京メッセージアウトライン（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ、2011 年 7 月 10 日、11 日）4 頁